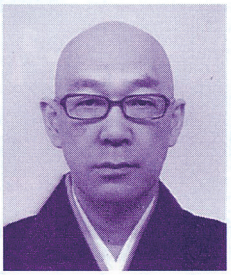
ほほえみひとつ涙ひとつ
出逢いも別れも抱きしめて
生きてる今を愛して行こう

同じ
平成27年9月25日
第42号
発行　梅花流師範・詠範の会
会長　本間雅憲
題字　初代会長・故加藤信三師
編集者（広報部）　亀谷　隆道
梅花流師範・詠範の会事務局
大仙市協和　太寧寺　伊藤道人
電話（0188-96-2029）

「まごころに生きる」に感動

秋田県梅花流師範・詠範の会 会長　本間雅憲



暑い夏でした。熱中症のニュースが日本中を駆け巡りました。大丈夫でしたか。室内にいても熱中症になるとのことでした。「暑さ寒さも彼岸まで」といいます。油断なく過ごしましょう。

今年度の梅花流秋田県奉詠大会は、五年に一度の全県大会にあたり「梅花流秋田県六十周年記念奉詠大会」～つたえよう清らかな心～として秋田市文化会館を会場として七月二十六日に開催されました。

檀信徒講員八登壇と養成所で研鑽している師範・詠範の一登壇の奉詠があり、それぞれすばらしいお唱えをいただきました。清興は（歌う尼さん）やなせななさんのコンサートでした。美しい歌声とお話に感動するとともに、曲目の中「まごころに生きる」に会場は大喜びでした。

さて、前号で速報としてお伝えいたしましたが、二級教範の受検が秋田県宗務所主催の検定会で受けられることになりました。新たな目標としてはどうですか。今年でなくても来年でも十分な準備をしつつ受検することを期待しています。

「諸嶽の山へ、報恩相承のお唱え」

『梅花流全国奉詠大会に参加して』

今年の全国奉詠大会は、神奈川県横浜市で行われました。この地はまさに大本山總持寺のお膝元であり、この度の二祖峨山禅師様の六百五十回大遠忌正当の法要を行う場としてふさわしい開催となりました。秋田県からは六十余人もの方が参加され、高知、徳島、香川、新潟の四県の方たちと合同の登壇奉詠となりました。

今年もなぜか昨年と同じく秋田から詠讃司、詠頭司が任命されたのですが、この度詠頭司を務められた鈴木裕子さんにその感想を寄稿していただきました。

禅林寺梅花講員
鈴木裕子

梅花流全国奉詠大会への誘いの話があった時、私は迷うことなく参加の申し込みをしました。横浜での開催も魅力的でしたし、二祖様の六百五十回忌の総持寺参拝はかえがたい因縁のように感じました。

一日一日と旅行が近づいてくるのを楽しんでいましたが、そんなある日、大会の登壇奉詠の詠頭司を引き受けてほしいとの依頼がありました。自分の未熟さを自覚し再三断ったのですが、結局はこれも何かの縁と思い、その依頼を引き受けることにしました。

登壇局は「釈尊花祭第一番御詠歌（歓喜）」です。詠頭司を引き受けたものの、練習では声が続かず節は途中で切れてしまい、同じところで失敗を繰り返すありさまでした。台所で、或いは車の中で声を出してみても、一度として上手く唱えることが出来ません。そうこうしているうちに大会がやってきました。

詠題の米塚さんと…

大会に向かうバスの中でも、頭に浮かんでくるのは、詠頭部分の「あなうれし」ばかりでした。横浜のホテルでは詠題司の友人と同室だったので、二人で声を合わせてみたのですが上手くいかず、本当に大丈夫なのだろうかと不安に思いました。ただ引き受けた以上は責任もあるわけで、本番で頑張ることにして深く考えないようにしました。

当日、大会会場の厳かで華やかな雰囲気に圧倒されながら、自分たちの出番を待ちました。呼び出されるままに秋田県や他県の方々と一緒に壇上に登り、鐘の音にうながされて詠題が始まったのですが、そのお唱えを聞いたら意外にも心が落ち着き、自分のお唱えから詠衆の方々につながった瞬間、ほっとして大きな荷物を下ろした気分になりました。決して満足のゆくお唱えではなかったのですが、得難い経験をさせていただいたことに対する感謝の思いが心いっぱいに広がりました。他の登壇奉詠の素晴らしさ、楽しい司会やサンドアートのアトラクションなど、一つ一つが心に残る思い出となり、会場を後にすることが出来ました。

大会終了後の旅行がいつも以上に楽しかったのは、色々な苦労があったからかも知れません。私の義母も梅花講の講員でよく全国大会に出掛けました。今は私がそのあとを引き継いでいますが、これも家族の理解と協力があってのたまものです。

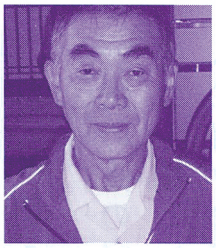
勇気を持って挑んだ全国大会の詠頭司は最高の思い出になりました。心より御礼申し上げます。

梅花流秋田県六十周年記念奉詠大会開催

今年は秋田県に梅花流が生まれて六十周年となります。その良き節目として、この度は秋田市にて一堂に会しての全県大会となりました。
現在梅花流は、中央より県南方面にも拡大中でありますが、その中には男性講員も見かけるようになりました。
今回参加し登壇奉詠された國安さんに大会の感想を頂きました。

「梅花流秋田県奉詠大会に参加して」

香最寺梅花講員　國安　市朗兵衛



私は今、「かまくら」で有名な横手の南端で暮らしています。
今年は雨が少なくこの日も晴れの厚い一日で、雨が降ってくれると良いなぁと思っていました。
朝お寺に集まり、二台の車で秋田に向かう事となりました。秋田市文化会館には全県から集まった講員の人たちがたくさんおり、この人たちと同じようにお唱えが出来るだろうか、と心の中では心配になっていました。何組かが終わり、自分たちの番が来た時は、緊張して顔から火が出るような気持ちだったけど精一杯のお唱えをさせていただきました。

師範の方々の三宝讃歌も心が洗われるようです。ハモるところも何とも言えぬくらいの感動を受け、アンコールができるならまた聴きたいなぁと思い、心の中に長男の姿を感じている私でした。
私が梅花と会うきっかけになったのは、長男に先立たれ、お寺の大般若に参加して、その時に講員の方々がお経中に唱える声を聴いた時でした。毎日が虚しく、悲しく、何をするにも前に進めず、毎日がただ無駄に過ぎていく。そんな気持ちの時で、お寺の山門や墓に、毎日通うことしかできないでいた私でした。
そんな時、お寺の先生から「大般若に来てみて」と誘われての参加で、聴いた途端、目からうろこが落ちたような気持ちでした。頑張って、ちからの限り仕事をし、夢の途中に心臓の病で一瞬にこの世から旅立った長男のために、泣いて悔やんでばかりでなく、私でも何か出来ることがあるかもしれないと妻と二人で会に加えてもらい、一緒に練習しています。会には男二人しかいませんが、頑張っています。
奉詠大会を主催してくれたスタッフの皆様と参加者の皆様に元気をもらいました。心から御礼申し上げます。充実の一日でした。ありがとうございました。

梅花のふるさと

一期一会

～詠讃歌の生まれた風景（その二十　報謝御和讃）～

久我尚寛師、忘れ得ぬ出逢い

報謝御和讃

一樹の蔭の宿りさえ
奇しき縁と知るものを
人の情けに宿借りて
暫し休ろう嬉しさよ

一河の流れ掬むにさえ
深き恵みと知るものを
真心こもる熱き茶に
疲れを癒す有り難さ

一期一会の人の世は
尊きものと知るものを
み篤き今日のおもてなし
いかで忘れん諸共に

久我尚寛 作詞

『報謝御和讃』は、昭和三十五年四月、久我尚寛先生の作詞、安田博道先生の作曲によって発表されました。

作詞者の久我先生は、明治三十五年生まれ。愛知県豊橋市の龍拈寺住職。草創期における梅花流先達の一人として活躍され、昭和四十一年、六十四歳で遷化されました。「太祖讃仰和讃」「法灯」はじめ多くの詠讃曲作詞、梅花譜の制定、詠唱のレコード吹き込み、また初期梅花流正法教会の組織作りや規則条項の整備など、梅花流におけるあらゆる方面に大きな業績を残しています。

ここにご紹介する文章は、『報謝御和讃』をご自身で解説をしている中で、創作当時のエピソードを語っている部分です。

◇山形の旅宿にて◇

私がこの御和讃を作詞しましたのは、先年山形県の余目に梅花流県奉詠大会があったとき、水島師範と共に審査員としてご招待を受け、藤島町法眼寺（百瀬師範の御自坊）に拝宿したときのことであります。

百瀬夫人と御同行の石黒夫人とが交々ご接待に出られて、その夜すばらしい玉露を薦められました。その香りその味わい余りにも美味しかったので、私は遂に三煎まで所望して甘味に浸りました。しかし因果応報、その夜床についたが、どうにも眼が冴えて眠られません。そこで思い立ったのが報謝和讃の作詞で、先づ「お茶」の章が先に出来、次に「宿借りて」の章が生まれたので、これを忘れないようにと懐中電灯の光で、懐紙に書きつけました。その後さらに第三番の歌詞が出来たので、翌朝その喜びを百瀬師範に語ったところ、水島師範も大変喜んでくださいました。

その日は百瀬師範の御案内で山形の霊山羽黒山に登り、温海温泉に泊まりました。道中、私は、思い出しては歌詞の推敲をしつつ、口ずさみながら、作曲節づけの工夫をしていました。そして温海温泉に着いた時、その試作を初めて口唱発表しました。その後自坊に帰って、楽器に合わせ採譜し、毎

久我尚寛先生

月実施する自坊の本堂再建托鉢の際には、ご接待を受けた答礼に、この御和讃を独唱していました。

◇一期一会の出逢い◇

そして昨年（※昭和三十四年）二月二十日のことです。私達同行五名の子弟が、豊橋市内大山塚方面を托鉢していた時のことです。同地の梅花流御同行が案内役に当たって下さって、豊橋五大製菓に数えられる水島製菓の御本宅にお導き下さいました。お手厚い茶菓のご接待を受けた後で、一同が御仏壇へ読経して、私が帰り際に玄関先で報謝和讃を独りで奉詠しました。その時奥様が感激に充ちた面ざしで深くうなだれている様子が、如何にも殊勝で印象に残りました。

その角先を出た時、私は思わず同行を顧みて「初めてお眼にかかった奥様だが、もの優しいお方だナ！」とつぶやきました。

「そうです、しかし何だか物淋しい気がしましたネ」

「そう云えば、影が薄いような…」

「或いはご病気上がりか、何かではないでしょうか？」

一行が思い合わせたようにそんな噂を交わしましたが、その奥様が急逝しようとはその時誰一人知る由もありませんでした。

私は新聞紙の死亡広告で、この奥様の急逝を知った時！ 飛び上がるほどの驚きを覚えました。

〈一期一会のこの世ぞと思えば尊し今日の縁、人の情けは末かけて忘れざらまし諸共に〉その祈りの歌詞はそうなっていて、それを私が一人でお唱えしたのでありましたが、全くその歌詞の通り、この奥様とのご縁は、この初めの際会が最後のお別れとなったのであります。正に「一期一会」であります。私はこの時ほど、人生朝露の理を深く感じさせられたことはありません。お通夜の時、私がこの思い出を語って、報謝御和讃をお唱えした時、並み居る人々は皆泣き崩れました。その時の感動は今もなお、忘れられぬ思い出であります。この御和讃は発表までに、そうした蔭の話のあることもご参考にして下さって、これを活用していただきたいと思います。

合掌

感恩報謝の歌

あな尊とし！　有縁無縁の諸人（もろびと）の
深き恵みを　受くる縁（えにし）は

以上が久我先生の文章です。これは昭和三十五年に発行された『梅花　正法教会シリーズ2』という小冊子に掲載されているものです。

この中で「一期一会」という言葉を紹介する際、久我先生は幕末の彦根藩主、井伊直弼の言葉を引いて次のように述べています。

（前略）井伊公が『茶湯一会集』という書物を遺して茶道の極意を伝えていますが、その中に、「一会に深き主意あり、そもそも交会は、一期一会と云いて、たとえばいく度おなじ客と交会するとも、今日の会に再びかえらざることを思えば実にわが一生一度の会なり」と教えられています。

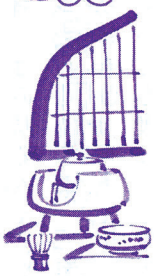
（中略）何も茶の湯のみに限りません。全く人生の時の流れも、一度過ぎて去っては再び帰らず、実に「一生百歳の日月は一度失わん再び帰ること難し」と道元禅師が『正法眼蔵』行持巻の中に教え示された通りであります。

この観点に立てば凡てのことが一度一会で、生涯一度の尊い機会であることを悟ります。

ささやかな出逢いも尊い大切なひととき、『報謝御和讃』はその思いとともに伝えられてきたのです。

みんな！梅花やってみネイガー

おらほの梅花講



寿永山円通寺

住所　由利本荘市西目町沼田字敷森二七
設立　昭和五十六年
講長　近藤　俊貞
講員　二十人（現在）

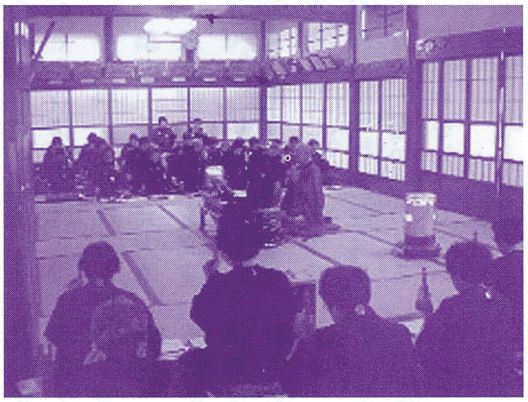
はじめまして。今回は円通寺梅花講の紹介をさせていただきたいと思います。

円通寺梅花講の設立は昭和五十六年で、翌年には秋田県の奉詠大会で登壇し、今までに在籍した講員さんは百五十名を数えるそうです。

講習会は毎月二十五日の午後七時から午後九時まで。参加人数は十五人前後で、沼田町内はもちろん、藤崎・正乗寺様の講員さんも一緒に受講されています。一昨年から別日で、近隣の宗老寺様の檀家さん（七～八人）が、町内の弔いで使う為御詠歌を覚えたいということで習いに来てくれています。副住も別日に十二人の新人さんを受け持って講習させていただいております。始めるきっかけはさまざまでも、梅花人口が少なくなる昨今、御詠歌に関心を寄せてくれることは大変ありがたいことだなぁと思っております。

お寺の行事では、五月一日の大般若法会・七月二十四日のお地蔵さん・十一月の梅花道元講などで、また沼田町内の葬儀の際、開式前にお唱えをしていただいております。

梅花講



道元講

講員さんのお宅に月命日で伺った際、昔の話をよく聞かせてもらうのですが、梅花を始めた頃は畑仕事をしながらラジカセのテープを流して練習したり、仲間の家に集まってみんなで練習していたそうです。しかし、お唱えもそこそこに別のお話に夢中になって帰宅が午前零時をまわることもあったとか（！）。そんなお茶目なお母さん達も今は大ベテランの域に。「梅花でいろんたどさ連れてってもらったなぁ～」と梅花全国大会の旅行の思い出を今でも楽しそうに教えてくれます。梅花プラスαがきっと長く続けるコツなのでしょうね。

最後に、「寿永山円通寺御詠歌」の紹介をさせていただきたいと思います。

詣るより罪はあらじの円通寺
大慈大悲の迎え給えは

「円通」とは「まどかに満ちわたる」という意味で観音さまを表し、大きな慈悲の心で参詣者を迎え入れてくださる様子を詠んでいます。

当寺には、江戸時代宝暦年間に書かれた本荘領三十三番霊場御詠歌の扁額残されており、その御詠歌を観世音菩薩第二番御詠歌「浄光」の応用替曲として、大般若法要の献供の際にお唱えしております。扁額に書かれた和歌には当時の情景を詠んだものもあり、梅花流の旋律でお唱えすることで、歌にさらに奥行きが生まれるような感動を覚えます。

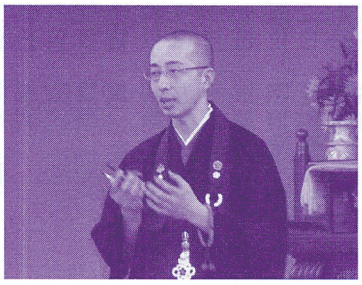
歌が扁額に筆で記されたことで、二百五十年の時を超えて今我々が目にし、当時を偲ぶことができます。これからは、旋律に乗せ歌い継いでいくことで、次代の人々の心に届き、残り続けて欲しいと願っております。

紹介者
円通寺副住職　近藤　俊彦

ちょっとぶじょほう ～梅花つれづれ～

『梅花の魅力』

由利本荘市西目町
円通寺副住職
近藤 俊彦（こんどう しゅんげん）



同行をご覧の皆様、はじめまして。

私が梅花流詠讃歌に初めて触れたのは、平成十四年に大本山総持寺にて安居修行をしていた頃でしたが、よく解らないままに講習・検定を受け「助教」という資格を頂戴して戻ってきたというのが本音です。その後、師匠から法具一式だけ渡され、自坊の講や随身先のお寺でも梅花に触れる機会は幾度となくありましたが、今一つ夢中になれず、その距離感は身近にありながらとても遠いものでした。

そんな中で、平成二十一年頃であったと思いますが、長谷寺住職・浅田高明師範からお誘いを受け、市内の東林寺様を会場にして宗侶・寺族向けの梅花研修会に参加することになりました。そこで心機一転改めて梅花に取り組むわけですが、いざ面と向き合うと様々な葛藤があるもので、簡単に思えた「聖号」の音程がまったくとれない、「紫雲」の特別所作に混乱、「2・2、2・1・1、3・1」など「専門用語」に戸惑う日々でした。

梅花の面白さを感じ始めたのは、平成二十三年六月に開所された県宗務所・禅センターでの指導者養成所に参加するようになってからでしょうか。そこでは、熱心且つ懇切丁寧に指導してくださる県内外の師範先生方や県内で梅花の習得を目指す年代も様々な方達との出会いがあり、時に懇親会などで親睦を深めつつ、同じ目標に向かって研鑽する楽しさを覚えていきました。

平成二十五年からは、東京・港区芝の曹洞宗宗務庁で開催される梅花流師範養成所に入所させていただき、二年間で計三十日間（五日間×六回）の研修を今年の二月に無事終了してきました。本庁養成所では、全国から梅花の習得を志す若い年代の宗侶が集まり、寝食を共にし、文字通り梅花浸けの日々を過ごします。回を追う毎にお唱えが上達し、形を仕上げてくる仲間に刺激を受け、とても貴重な体験をさせていただきました。

養成所最終日。謝恩会も終わり、仲間と余韻に浸っていると、浅田師範から電話があり「四月の宗務所講習ヨロシクね」との慈愛に満ちた一言。先程まで梅花を覚えるのに必死だった私が、今度は公に梅花を教えていく立場へ。しかし、他の師範の先生方も口を揃えておっしゃる通り、これが非常に良い経験になります。人に教えるためには、歌詞の解説やお唱えの要点を自分の中で消化していなければ伝えることができませんし、何よりも自信を持ってお唱えができません。現在、自坊の初心者講習や近隣の御寺院さんからも講習を依頼されることがあり、人前に経つ緊張感と伝えることのやり甲斐を同時に感じております。

二年程前から、斎場や法事・通夜など、供養の場でも読経と共に御詠歌をお唱えするようになりました。時に短調の曲などは悲しみを強めてしまう可能性もあり躊躇うこともありますが、御詠歌の旋律や歌詞には読経とはまた違った、人の心にそっと寄り添うような柔らかさがあり、何かを感じてもらえるようなお唱えを心掛けていきたいと思っています。

ここ数年、以前に比べて梅花の檀信徒講員さんがだんだん少なくなってきたという話を耳にします。高齢化や趣味の多様化なども一因としてあるのだろうと思いますが、御詠歌に触れる機会を地道に丁寧に、意識して作っていくことが大切なのではないかと思います。「梅花の魅力」とタイトルを付けましたが、人前でお唱えする際は心拍数が上がりキチンと緊張しますし、衣の下はいつも汗シットリです。もしかしたら精神的にも体調面でも良い影響はないのでは？と真剣に思ったりします（・・・冗談です）。人との出会い、珠玉のメロディーの数々、特別所作や無理だと思った曲を何とかお唱えできた時の喜び。梅花の魅力は、続けて行けば行くほど感じることができると思います。師範としては檀信徒の皆さんに梅花を解りやすくお伝えできるよう、同行同修の仲間とは楽しみながら活き活きと梅花を続けて行きたいと思っております。

今後ともどうぞよろしくお願い致します。

テレホン梅花

☎〇一八ー八七三ー七六七六（ハナミ ナムナム）

（毎週土曜日にテープが代わります）

平成二十七年

◆十月三日　達磨（和）
十日　廓然
十七日　總持二祖（和）
二十四日　永光（總持二祖）
三十一日　影向（和）

◆十一月七日　伝光
十四日　正行（和）
二十一日　報恩供養（和）
二十八日　澄心

◆十二月五日　成道（和）
十二日　明星
十九日　法灯（高祖）
二十六日　報謝（和）

平成二十八年

◆一月二日　同行（和）
九日　道交
十六日　慶祝（和）
二十三日　誓願（和）
三十日　まごころに生きる

◆二月六日　渓声（永平一）
十三日　涅槃（和）
二十日　不滅
二十七日　供華

◆三月五日　四摂法（和）
十二日　花供養（和）
十九日　香華
二十六日　供華

※ご意見ご要望等をお気軽にお寄せ下さい。

〒〇一〇ー〇一一
秋田市金足岩瀬字前山三
東泉寺（〇一八ー八七三ー二六七五）

■禅センター梅花講習

【檀信徒講習会】
〈午前十時半～午後三時〉

十月二日（金）
課題曲　報恩供養御和讃
澄心

十一月六日（金）
課題曲　観世音菩薩御和讃
浄光

十二月三日（金）
課題曲　誓願御和讃
渓声

二月四日（金）
課題曲　新亡精霊御和讃
妙鐘

三月四日（金）
課題曲　花供養御和讃
供華

※課題曲を確認してお気軽にご参加下さい。
初心、上級の二会場に分かれて講習。受講無料にて。

■檀信徒講員一泊研修会

◎県北地区

先月の八月二十六日～二十七日におなじみ大館市の大滝温泉富士屋ホテルを会場として、開催、無事終了いたしました。この度はお盆後の急な時季でありましたので、参加者は六十名余でありましたが、二日間の充実した講習会であったと思います。

◎中央・県南地区

こちらもこの度終了致しました。七月に御案内があったと思いますが、九月十八日～十九日の二日間、由利本荘市の恵林寺様を会場にして講習会を開催し、宿泊懇親はハートポート大内「ぽぽろっこ」でとのことでした。詳細は次号に掲載致します。

検定会のお知らせ

～27年度課題曲決定～

平成27年度の秋田県の梅花流検定会を開催いたします。この度は遂にご当地秋田県での二級検定が受検できる事と相成りました。これにより、多くの講員さんがもう一歩上を目指すことが出来るようになりました。「70, 80過ぎてまで東京に一泊旅行なんてなぁ、観光でもねべしお金もねべしカラダに悪いわ」なんて敬遠していたアネコ、いや秋田おばこさん、ぜひ挑戦して下さい。やさしいご当地の検定委員さんがお待ちしております。まれもやっと世界一のパティシエになろうとしているんですから。（もう終わるけどね）

※尚、見台、イス、机をご使用の方は申し込み時に記入のこと。

【日程・受付 9時 / 開講式 9時30分 / 検定開始 10時】

■県　北　地　区　9月19日(土)　/　会場「リトル大滝」
大館市大滝温泉　☎0186-52-3811

■中央・県南地区　11月13日(金)　/　会場「さとみ温泉」
秋田市添川　☎0188-33-7171

●詠範（寺族）検定課題曲

補　教	正法・四攝法・紫雲より２曲。
詠範補	誕生・梅花・浄心・入寂より２曲（和讃は立行）
五級詠範	地蔵・無常・月影・慈光より２曲
四級詠範	不滅・追弔・花祭・成道より２曲（和讃は立行）
三級詠範	廓然・菩提・妙鐘・澄心・新亡精霊より３曲（和讃は立行）

●檀信徒検定課題曲

教　導	三宝・正法
権正教導	聖号・修証義
正教導	浄心・紫雲
権中教導	梅花・誕生より２曲（和讃は立行）
⇨中教導	渓声・菩提より２曲（和讃は立行）
権大教導	入寂・讃仰・無常・月影より２曲（和讃は立行）
大教導	不滅・明星・慈光・地蔵・追善より３曲（和讃は立行）
三級教範	紫雲・法灯・菩提・新亡精霊・正行より３曲（和讃は立行）
二級教範	渓声・月影・地蔵・達磨大師・高嶺・妙鐘より３曲（和讃は立行・分節詠唱あり）

※中教導合格で水色のフサに、三級教範合格で白色のフサに変わります。